

メープルレター（81）

冬の最中

長い冬の最中です。ドカ雪が降ったり、極寒になったりしますが、大半は、空はどんよりした灰色の低い雲に覆われています。マイナス10度前後の外気の中をぶ厚いコートで出かけたり、暖房をきかせた家の中で息をひそめて暮らす冬の日々です。

新年は何やら、多難な年になりそうです。ドリトル先生は、1月半ばの心臓医との面会で、年末の数限りない検査の結果を聞き、今後を検討ことになっていました。本人の命がちじまりそうな心配とは裏腹に、24時間中6秒の不整脈を除き、全ての結果は良く、薬で安定した状態が保たれているとのことでした。今年の10月に念のため、もう一度検査をすることにはなりましたが、安心した暮らしができると聞き、胸をなでおろしました。

その2日後、娘の家で婿殿のプロ級のコーヒーを飲み孫とひと遊びした帰りがけに、道を渡ろうとしていたドリトル先生は、一方通行の道をもすごい勢いでバックしてきた車にあたられ横倒れ。何と、モンリオール市の駐車違反取締の車で、違反チケットをあの車に貼ってもうひと稼ぎと急いだのか、後方を確認せずにバックしてきたのです。

「貴女、彼を押したわよね、その車で。 ひき殺す気？」

息まくマダム田中。

「後ろを確認しなかったのです。すみません。」

車をドリトル先生の隣につけ、

「ムッシュウ、大丈夫ですか、怪我はありませんか。」

もう真っ青です。ドリトル先生は、何事もなかったかのように立ち上がり、大丈夫と手を振り、道を横切り、車に乗り、帰宅の途につきました。

ところが、帰宅して2時間後のこと、倒れて車道にぶつけた膝の激痛に苦しみだしました。外見は擦り傷程度で、それ以上の外傷はみあたりませんでした。30分後にはとうとう歩けなくなりました。冷やしや鎮痛剤でも状況は変わることはなく、痛みを苦しむまま、一晩が過ぎ、翌日病院の緊急に行くよう勧めても楽観し、鎮痛剤でまた1日を過ごしたのです。マダム田中はしびれを切らし、緊急連絡サービスに電話し、相談をしたものの、文句だらけのドリトル先生は、寝てれば何とかなるの楽観で家にかじりついて、また一晩が過ぎました。

「このままだとびっこになるわよ」

マダム田中の怖い一言で、やっとその翌日には緊急に行くことを承知しました。何時自分の番になるかわからない緊急で待つこと2時間。やっと緊急医に会えました。

事故当時に歩けたこと、常時の処方箋の薬のリストをみた後、

「レントゲンを撮ってみましょう。」

レントゲンを受け、この医者との再会するまで更に2時間の待ち時間。

「ラッキーですね。骨折はしていないようです。老齢で膝の関節の状況がはっきりわからないこともあるので、念のためスキャンをとってみましょう。スキャンが空き次第連絡しますからお待ちください。」

ということでスキャンの順番待ちで更に1時間。苛立つマダム田中は、侵入禁止の緊急病棟を緊急医を探して、歩き回り、やっとみつけると、

「スキャンどうなっているのでしょうか。」

「まだでしたか。ちょっと待ってください。」

スキヤンの係に電話をいれ、

「少し待っていてください。もうすぐですから」

更にそれから待つこと1時間。やっと順番がきましたが、スキヤンはたった5分。結果を待ち、緊急医の最終的な診断を受けることになっています。

更にそれから待つこと2時間。苛立つドリトル先生。

「4時になったらどうでもいいから帰る。」

朝から待つこと8時間。3時50分。緊急医から呼び出しがはいり、面会になりました。

「ラッキーですね。スキヤンでも骨折はでませんでした。何でもないので。痛みや腫れは、心臓や血圧のための飲み薬の副作用で、ショックによる内出血です。ひやして鎮痛剤を飲んで（どれを飲んでも良いということはなく、他の薬に影響ない物）、脚を高くしてゆっくり休んでください。」

「回復にはどのくらい時間はかかるのでしょうか。」

「何とも言えません。痛く無くなるまでですね。」

マダム田中には骨折ではないことは経験からわかっていました。骨折したら歩けませんから。疲れ果て、歩行器でやっと家にたどりつきました。事故後1週間目位から次第に歩けるようになりましたが、回復し普通に歩けるようになるのにはまだまだ時間がかかりそうです。高齢も回復には障害になっているのかもしれない。ドリトル先生は、退屈にしぶれ切らし、10日目には、脚を引きずりながら、車を運転し、アルバイトにも出かけていきました。

こうしたドリトル先生の健康の迷路に入ったような日々に、娘から、スポーツクラブの子供コーナーで楽しそうに友達と遊ぶ孫のビデオが送られてきました。

「楽しそうね。」

「保育園のママ友と一緒に毎週子供達を遊ばせに行ってるのよ。寒くて外では遊べないけど、このスポーツセンターの子供コーナーには遊びがいっぱいあるから、エネルギー発散できるし。そうそう、ママ友は二人なのよ。ほら、ママが二人いる子なの。」

「ママが二人？」

「カミングアウトした女性二人のカップルよ。人口受精でできた子供よ。」

「そうなの。二人の一人が人口受精で産んだわけね。パパはどんな人」

「あら、パパはインターネット注文よ。」

マダム田中の頭は混乱し始め、口はあんぐり、目はぱちぱちするばかりです。

「インターネットでなるべく条件にあうパパを選んでその人の精子を買うのよ。」

永遠に会うことはない父親と二人の母親。無邪気に遊ぶこの子はどんな運命を持つことになるのでしょうか。

「とても素敵なママたちで、一人は大学教授よ。色々聞きまくったけど、娘を本当に大事に可愛がって育てているわよ。」

楽しく友達と遊び、すくすく育つ子は、どんな環境であれ、やはり、可愛く先入観だけではかたづけられないものがありそうです。孫の厳格なカトリックの保育園でも、世の流れをこうして受け入れられるようになったようです。

「そうなんだ。子供もママたちも幸せなんだね。それが一番大事かも。」

「そうだと思う。」

孫やこの子たちは変わりつつある現代をさほど問題もなく生きていくことになるようです。何事もなく、ただ穏やかで平凡な日をひたすら送りたいとマダム田中は思う日々でもあります。